

新批判主義の社會哲學(フォルレンダー)(二)

五十嵐 信 譯

四、ナトルプ

シュタムラーの「經濟と法律」が現れる以前に、既に、マールブルクの哲學者バウル・ナトルプは、*Archiv für systematische Philosophie* に掲げられた數多の論文に於いて、「意志陶冶の理論の輪郭」(*Grundlinien einer Theorie der Willensbildung*)を展開して居た。それらは、シュタムラーの右の書よりも三年后に出た體系的名著「社會的教育學、共同體を基礎とする意志教育の理論」(*Sozialpädagogik, Theorie der Willenserziehung auf der Grundlage der Gemeinschaft*, Stuttgart 1899)³⁴⁾の序曲を成すものであつた。而して、シュタムラーがその思想から云へば一切の方面に亘り且つ向つて居る極めて廣汎な論述に於いて説いて居る事柄は、ナトルプに於いては、極めて簡潔に要約せられて、彼の主題たる、**共同體を基礎とする國民教育論**(*Volkerziehungstheorie*)の體系的確立の、單に緒論を成すに過ぎないものと、なつて居る。

ナトルプは、多年、この問題を研究して居た。彼は、その「人道の限界内に於ける宗教」(Religion innerhalb der Grenzen der Humanität, Freiburg 1894, 長い跋文を追加して居る第二版は、Tübingen 1908)に、既に、『社會的教育學の定礎のための一章』と云ふ副題を附して居る。それよりも小さな諸著、殊に、「勞働者陶冶及び社會問題に關するペスタロッチの思想」(Pestalozzi's Ideen über Arbeiterbildung und soziale Frage, Heilbronn 1894)及び「プラトンの國家と社會的教育學の理念」(Platos Staat und die Idee der Sozialpädagogik, Berlin 1895)も、また、その標題によつて既に知られるやうに、同じ目的に献げられて居る。而して、右の新著は——これまでの社會哲學が殆んど全く看過して居た領域——社會論(Gesellschaftslehre)と教育論(Erziehungslehre)との諸相互關係を研究し、而も、この兩者が『最も深い根柢に於いては單一不可分に相屬して居る』(序言五頁)ことを證明しようとするものである。併し、この目的に到達するためには、兩者の哲學的基底に溯つて、體系定的定礎が行はなければならない。かくて、この書は、その標題が最初推測せしめるよりも遙かに多くのものを、包含して居る。即ち、一、認識批判的定礎、二、倫理學の諸主要概念、三、社會哲學の基礎、而して、四に至つて、初めて、『意志教育の體制及び方法』としての社會的教育學の體系の梗概。而も、これらの凡ては、僅か三百五十頁の中に收められて居るのである。我々は、次に、せめてその基本思想をのみなりとも、摘出して見よう。確かに、これは、豊富な内容がかく簡潔な形

式の中に盛られて居る場合にあつては、なかなか容易なことではないけれども。²⁶⁾

一、認識批判的・倫理學的並びに社會哲學的定礎

この『定礎』は、この書の全體がさうであるやうに、新批判主義の地盤の上に立つて居る。教育は、意志陶冶 (Willensbildung) である。併し、意志は、當爲・理念 (ein Gesolltes, eine Idee) の目標設定・決定 (Zielsetzung, Vorsatz) である。理念に於いては、自然の世界——その最高の諸概念及び諸法則をば、科學は、因果的に、餘すところなく研究しようとするのであるが——の總體に對立する一の全く新しい見地——自然科学的にも心理學的にも (心理學もまた自然科学である) 理解せらるべきではなく、認識批判的に理解せらるべき——が、出現する。我々は、まづ、時間的に制約せられて居る思考以外に別になほ云はば超時間的思考——例へば、論理的思考や數學的思考の如き——が存在することを、會得しなければならぬ。 $A \equiv A$ 或ひは $2 \times 2 = 4$ の如き命題は、いかなる時にも、異るところなく妥當するのである。この意識に於ける統一を換言すれば思考せられるものの普汎的關聯を求めるところの論理的思考によつてのみ、理論的認識或ひは自然認識 (カントに従へば、經驗) は成立する。併し、この經驗認識は、その性質上、完成せられることができず、無制約的なものに於いて完結せられることができない。ここに、カントの語義に於いての規制的理念

(die regulative Idee)、『認識の最後の統一・最後の最も固有な觀點』(三四頁)が、現れる。諸々の目的を而して最後には一切の目的の目的(究極目的)を問題とすることによつて、我々を意欲・當爲の範域に従つて倫理學の範域に導くところの、目的設定の領域が、ここに、我々の前に開かれるのである。

さて、當爲の法則性(Gesetzlichkeit des Sollens)は、いかなる點に存立するか。この問題は、科學的倫理學の基本問題でなければならぬ。而して、これに對する解答は、私の諸目的の『形式的』統一の中に、換言すれば、それら目的相互の必然的一致の中に、である。統一の法則(das Gesetz der Einheit)——これは、カントの先驗的方法によつて規定せられて居る、ナトルプ哲學の基本思想である——は、意識の基本法則(das Grundgesetz des Bewusstseins)である、而して、これは、先づ、理論的認識(數學的或ひは量的、及び、自然的或ひは原因的法則性に於ける)を支配し、次いで、同様に、實踐的認識(目的法則性に於ける)を支配する。かくて、倫理學は、中斷なき關聯に於いて、論理學に連結して居る。カントの形式的道德法則は、理性の規準に従ひ理性の支配の下に屬する諸目的の無制約的に統一的な秩序を、意味するものに、外ならないのである。

經驗は、勿論、それ自身からは、このカント的な純粹理念の倫理學をばその最後の形式的基礎に於いて確立し得ないが、併し、かの新しい法則性(目的設立の)は、その素材から見れば、全然、

經驗に依存して居る。而も、當爲 (Das Gesollte) は、實現せらるべきものである。然らば、經驗は、いかにして、素材を提供するか。また、素材は、いかにして、自己をかの純粹形式に適合せしめるか。これを、ナトルプの明敏な演繹を辿つて述べることは、我々の主題を離れることになるであらう。我々は、著者が三つの『活動の段階』(Stufen der Aktivität)——その中、後のものは、夫々、その前のものを包括するところの——を區別して居ることを述べるのみに、止めて置く。即ち、一、衝動、二、意識せられて居る意志、三、理性意志。而して、これらに對しては、次のやうな興味ある平行が、理論的領域に存する。即ち、一、單なる表象、二、意識的に客觀化せられて居る表象、三、科學的客觀認識。終りに、これらは、社會的領域に傳達せられて、次の三つとなる。即ち、一、自然力、二、技術による自然力の意識的支配、三、人間の最高の目的たる人間陶冶 (Menschenbildung) の下への技術の從屬。

併し、人間陶冶は、人間の共同體 (menschliche Gemeinschaft) の中に於いてのみ而してそれによつてのみ、可能である。従つて、凡ての教育學は、根柢に於いては、社會的教育學である。而して、眞の社會主義は、正當なる個人主義を排斥せず、それを包含する。何となれば、共同體への向上は、自我の制限をではなくその擴張を、個人の抑壓をではなく却つてその初めての眞の展開を、意味するからである。——次いで、我々の哲學者は、その次の『倫理學の諸主要概念』に關する章に於い

て、プラトンに自由に依據しつつ、個人的諸基本徳行（信實、勇敢或ひは道德的元氣、純潔或ひは節制、公正）の體系を概説して居るが、これは、倫理學者にとつては大いに興味があるにしても、我々の當面の問題に直接に關係がないから、我々は、その大部分を省略することとする。ただ、第四即ち最後の徳行たる公正のみは、ここに考察を加へて置かれる必要がある。何となれば、これは、社會的徳行の個人的基礎だからである。而して、これが然る所以は、これが信實と道德的元氣と勞働及び享樂に於ける正常なる程度とを共同體のために要求する點に、存する。これは、その最後の基礎をカントの所謂各人——最も貧しき者をも更に最も惡しき者をも含む——の身内に於ける人間の畏敬の中に見出すことによつて、——フイヒテにあつてと同様に——人間の相貌を具へた一切の者の平等を要求するのである。尤も、この平等は、機械的なもの、即ち、諸財が適宜に分配せられることでは、あり得ず又あるべきでなく、自己の能力を完成する可能が一切の者に平等に與へられることでのみ、あり得又あるべきである。さて、個人の信實は個人的憎惡・階級的憎惡・種族的憎惡とはならず反對に公的生活に於ける理性的洞察の支配となり、道德的元氣は、自己の並びに社會の力づよい同情及び反感を排斥して法律及び法則性のための保證となり、中庸は、勞働及び享樂一般の調和的秩序となる。而して、終りに、社會的公正は、各人が適度に陶冶・統治及び——勞働 (Bildung, Regierung und Arbeit) に參加することを、要求するのである！

新カント主義的哲學と社會主義との關係に對して極めて直接的な意義を持つのは、§一六—§一八に、驚嘆に價する手際を以て僅か四十八頁（三一一—三七八頁）に要約せられて居る、批判的社會哲學の基礎である。第一編に擧げられて居た、三つの『人間活動の基本因子』——衝動・意志・理性——は、それらの運載者の社會的生活に移されて、それ自らは共同體の理性的批判（die vernünftige Kritik der Gemeinschaft）の下にあるところの共同體的意志規制（gemeinschaftliche Willensregelung）（技術によつての）の下にある、労働共同體（Arbeitsgemeinschaft）を生ずる（一三四頁）。而して、それから、更に、三つの夫々自己を絶えず新たに産出し形成する社會的行爲の基本部類が、生ずる。それは、即ち、經濟的・統治的・陶冶的活動（die wirtschaftliche, regierende und bildende Tätigkeit）であつて、これから各活動は、夫々、獨特の目的を持つが、併し、その追求に於いては、他の兩者を要求する。殊に、經濟と法律とは、共に、人間陶冶と云ふ一の最高の目的に對して單なる手段として仕へるが、而も、この最高の目的は、また、經濟的労働及び政治的活動をば道徳的に高尚ならしめ得るのである。

ナトルプの『社會的發展の基本法則』（§一八）は、その時間的事象——これの現實的認識のためには、彼の見るところによれば、今日の科學の状態に於いては、未だ、最も不可欠な諸前提が欠けて居る（二六二頁）——の因果的説明を提供しようとするもの従つて自然法則或ひは經驗法則た

らうと欲するものではなく、理念の規制的法則——これは、而も、經驗の普遍的諸法則と極めて緊密に體系的に結合して居るのである——として解せらるべきものである。自然認識と技術と社會的規制と社會的生活の合理的形成とは、互ひに、空隙なき關聯に於いて、連絡して居るのである。

最初の三段階の關聯は、所謂唯物主義的歴史觀も、これを、明かに認識して居る。それになほ欠けて居るのは、最高の段階への意識的向上である。而して、このことは、結局、歴史的唯物主義も自然科學的唯物主義も本來認識批判を欠いて居ることに基因して居る。いかなる自然法則も我々の外には存在しないやうに、社會的法則性は、意識的法則性に外ならず、これを社會的『物質』から導き來ることは、眞摯には、不可能である。而して、また、何れの物質的或ひは精神的進歩も、自然科學的認識・社會技術的洞見・秩序づける意志に基くが故に、やはり、意識に基く。確かに、この認識並びに意志の進歩は、最初から意識せられ意欲せられ得るのではない。併し、ナトルプは、意志に依存しない社會的生活の『植物的』(vegetativ)部分を想定するヘンニースとは反對に、『極めて徐々に行はれ目標を缺いて居るやうに見える、早代の諸發展段階に於ける進歩も、やはり、常に、認識及び意志の進歩、即ち、それらのそれだけ徐々に行はれそれだけ目標が意識せられて居ない進歩であつたのだ、』(二版跋文一三頁)と考へる。また、彼は、『現實の進行が種々に非理性的であり法則を持たぬやうに否法則に反するやうにさへ見えること』(同一六頁)は、盲者にとつても明らかで

あるが、而も、發展法則そのものの存在は、争はれない、『社會的認識及び社會的意志が、發展し、従つて、本來それらが具有すべき植物的諸機能に對する支配的地位をば獲得する度合に應じて、進歩は、一般に、それだけ目標が確認せられて居りそれだけ中斷のないもの、一言にして云へば、それだけ「強制的な」ものとなる。』(同三・一四頁)と考へる。かくて、『最下の物質的諸條件から最高の意識形式の法則即ち理念の法則にまで亘つて、一つの普汎的にして中斷なき關聯』が、存立するのである(一六六頁、二版一八六頁)。我々は人類の理念・人間の社會的理性が關與して居る事象をのみ『言葉の完全な意味に於ける』歴史と解する、と云ふ理由のみによつても、人類の歴史的發展の法則は、自然の經驗法則ではなく、理念の規制的法則でなければならぬ。新しい社會的秩序を創造する爲には、確かに、先づ、最高の技術的而も社會技術的(sozialtechnisch)洞見が必要であるが、併し、最後の指導點及び觀點として、諸目的の可能的最善の秩序の理念も、また、それに劣らず不可缺である。この理念は、云ふまでもなく、もし、朦朧曖昧な唯心主義に墮すまいとするならば、社會的物質と、その最後の根柢にまで溯つて、合法的にして中斷なき關係を保たなければならぬ。かくて、ナトルプが明敏にもカントの三つの『規制的原理』(同質 Homogenität・特殊 Spezifikation・親縁 Affinität)或ひは、ナトルプの一層現代的な表現に従へば、普遍化 Generalisation・個別化 Individualisation・不斷の推移 stetiger Übergang)を自然の領域から技術的・社會的・道德的領域にも傳達することによ

つて一層緊密に一層體系的に形成し得て居るところの、社會的生活の上述の諸基本因子の普及的法則關聯が、生起する。社會的發展の道德的究極目標にして同時に人間の陶冶の基本法則たるものをば、著者は、ペスタロッチを想起しつつ、人間がその諸基本能力を空隙なく矛盾なく關聯せしめて全面的に展開する場合に於ける諸目的の統一的道德的秩序に於いて、見るのである。

二、社會的教育

個人並びに共同體に於ける永遠の勞作によつて而も全人類の最後に於いて（一八八頁）この理想に到達しようと努力することが、『究極目標』への運動である。この目標に或ひは少くともこの目標への道に到達するために、我々は、何を爲さなければならぬか。この問題に對する解答を、それが教育學の領域に屬する限りに於て、示すのが、この書の後半、意志教育のための體制及び方法としての社會的教育學（一九一—三五三頁）である。これ、意志を教育するための最も本質的な手段は、家・學校・公的生活に於ける共同體の體制（die Organisation der Gemeinschaft in Haus, Schule und öffentlichem Leben）に存するが故にである。この部分が教育學者・倫理學者・社會政策學者に與へる豊富な實際的刺戟は、各自、親しく原書を読んでこれを知られよ。著者の基本態度は、上述によつて、もはや、明白である。我々は、ここには、教育學に固有な事柄をば省略して、社會政

策學者にとつて關係ある二三の點のみを摘出して置く。

現在未だ見えざる内的改造の時期にあるところの、家族は、勿論、我々にとり永久に消滅せる時代の窮屈な古風な形式にはもはや復歸し得ないが、而も、我々は、さうだからと云つて、その瓦解を拱手傍觀して居なければならぬ筈はない。經濟的發展の明かに増進しつつある集中化は、恐らく、勞働運営 (Arbeitsbetrieb) の個別化と結びつき得るであらう。これに反して、勞働者が機械に否機械の一部分に引下げられることは、社會的發展の法則によつて同じく要求せられるところの勞働者が統治的並びに陶冶活動に参加することと、結びつき得ない。『個別化せられた勞働の復活、並びに、機械の奴隷の精神的並びに法律的解放は……勞働そのもののために、ますます個別化せられた教育を要求し、従つて、勞働者の軍隊的に粗雑に且つ機械的に集中化せられた生活をではなく個別化せられた生活——それは、恐らく、たとひ從來のものとは型を異にして居るにしても、やはり、自宅生活・家族生活に外ならないであらう——を要求する。』(一九七頁、二版二二頁) 強い共同體生活と健全な家族生活とは、恐らく、結びつき得るであらう。例へば、フロエーベルの幼稚園のやうな、今日の萌芽的始源は、漸次に、一層一般的な體制(家族聯合 Familienverbände や近隣組合 Nachbarschaftsgilden のやうな)に擴張せられるであらう。勿論、そのためには、勞働階級は、『何よりも先づ教育のために要望せらるべき、法律をもつて勞働時間を制限すると同時に適當な勞働報酬

を確保することによつての、勞働強制からの一層大なる自由』を、必要するであらう。學校教育のためには、ナトルプは、極めて廣い意味に於いての實際の國民學校 (Volksschule) を要求して居る。何となれば、彼は、凡ての者は、尤も正確に同じい陶冶をではないが併し恐らく彼らの陶冶に對する同じ配慮を要求し得、大なる陶冶共同體への參加——但し、能力のみが標準とせられ、それ以外の特權が標準とせられることのない——を要求し得る、と考へるからである。彼の提案——我々はここにそれを論議しようとするものではないけれども——は、我が國の初等並びに高等教育制度一度の最近の發展によつて大いに實現せられるに至つたが、次の様なものである。十二歳までは、般的義務的國民學校に入れる。次いで、職業に對する準備を授ける。即ち、眞に理論的發達を遂げる能力ある者は、これを『新入本主義的高等學校』(das „neuhumanistische Gymnasium“) に入れる、實業に就くべき者は、これを種々なる(任意選擇が許されて居る)専門課程を有する實業學校或ひは實科學校(eine Gewerbe- oder Realschule)に入れる。これは、從來の不完全な連續學校(Förderungsschule)に代つて凡ての者を十八歳まで收容する一層自由に組織せられて居る完結學校(Vollerschule)であり、同時に、職業的發達の發端(見習期)と結びつき得るものである。終りに、成人の共同生活に於ける自由な自己教育の段階のためには、現在の大學を眞の universitas 即ち Hochschule für die Gesamtheit に擴張する。而して、これは、英國及び米國に於ける『大學擴張運動』並び

にスカンディナヴィア諸國に於ける『民衆大學』に——後者には、なほ、學生の秩序ある共同生活に關しても——結びつき得るであらう。

要するに、プラトンが既に看破して居るやうに、教育は、共同體に役立たなければならず、共同體の生活は、結局に於いて、教育に役立たなければならぬ。尤も、プラトンは、共同生活に對する精神陶冶及び分業の價値をば過大に見積り經濟的並びに政治的因子の價値をば過小に見積つたために、この思想を充分に徹底せしめては居ないけれども。我々は、凡て、社會的教育を受くべき使命を有する。凡ての人間の存在——たとひ、それが如何に取るに足らぬものであるにもせよ——の究極目的は、經濟及び法律ではなく、人間性の完成である。而して、眞の共同體生活に基いてのみ、教育、即ち歴史的（二八五頁以下）・倫理的（三〇三頁以下）・哲學的（三一〇頁）教育は眞の果實を結び、審美的水準は高まり（三一八・三一九頁）、終りに、宗教的感情即ち人間感情及び永遠感情が成長することは、可能である。古き彼岸宗教（Jenseits-Religion）は、その役割を演じ終つた（三五二頁）。今や、それは、新しき一層成熟せる『人道の限界内に於ける』宗教に、ナトルプの考へるところによれば、理念に對する信仰のみから成る宗教に、變じなければならない。而して、これは、人爲的に作られるものではなく、『人間の共同體の道德的革新の結果』として何れの日にかひとりでに現はれるものなのである（三五二頁）。

三、カント紀念論文 社會主義と個人主義

かかる見地から出發して、ナトルプは、そのイマヌエル・カント没後百年紀念論文に於いても、批判哲學者は『社會哲學に於いても我々の指導者でなければならぬ』と明言し得た。ナトルプによれば、晩近の社會主義は、惜しい哉、カントに向はうとして居ない。それは、このことをば、たとひ全く拒みはしないにしても、無くても濟む『裝飾的附屬物』と見做して居るやうである。これは、『批判的基礎の上に立つ社會哲學が道德的要求の普遍性の中にのみ停滯して居て經濟學及び法律學の嚴密な方法にまで到達し得ない間は』、確かに、恕せらるべき事柄である。社會哲學は、それに到達することによつてのみ、時代が提出する一定の問題に對して一定の解答を與へ得るものとなるのだからである。併し、今や、それへの『最初の若干の前進』は、既に行はれて居り、『これ以上の前進も、期待せられ得る。』カント自身は、確かに、社會哲學に對しては、『二三の極めて一般的な命題』を寄與して居るに過ぎない。かくて、それらの歸結を展開することこそ、我々に與へられた『大なる感謝せらるべき課題』となるのである。なほ、『科學的』社會主義は、『その本質的諸主張』をば、毫も、ヘーゲル哲學——『科學的』社會主義は、歴史的には、これから生れて居るのであるが——の特殊な諸前提の上に基礎づけて居ない。ヘーゲル主義は、かの偉大な社會主義者たちに

とつては、**結局、進化主義** (Evolutionismus) がその當時に於いて取つた形體に外ならなかつたのである。併し、單にこの點のみから云つても、『**進化主義の健全な理論的基礎はカントの規制的諸原理であることが洞見せられさへすれば**』、『**社會主義の哲學的確立の問題全體は、批判哲學の地盤の上に移る、而して、批判哲學は、また、この緊急な課題をば回避しては居ないのである**』(三二・三三頁)。

併し、**ナトルプ**によれば、**批判的意味に解せられた倫理學**は、また、**社會史**即ち『**人間の共同體秩序の形成並びに變革**』の歴史にとつても、**北極星**である。而して、ただに、**教育學**ばかりが『**社會的教育學**』に深まるべき地點に到達して居るのではない。更に、**科學・藝術・宗教**も、また、『**共同體の生活**——**經濟**即ち**社會的營養秩序の強固な物質的基礎**に基き、**成文の法律**従つて**國家の眞鑄**のやうな形式に於いて、**自己を形成し……變革するところの**——に於いて**確固たる支持**を求めざるを得なくなつて居るのである。(三九一・三九二頁)

併し、**政治的並びに經濟的鬭争**に於いて**沒黙**を穿ること、或ひは、**社會的諸問題の理論的精練**に於いて**卑怯**にも『**當代の諸權力**』(„Mächte des Tages“)に届することは、**理性及び科學の爲すべきことではない**。ナトルプが既に十年以前にその『**人道の限界内に於ける宗教**』の序文の中に記して居るやうに、『**問題が時代の情勢によつて根本的に提出せられて居るとすれば、根本的な解答従つて科學が必要である、而も、この或ひはかの科學がではなく、根本科學** (Radikalwissenschaft) 即ち**哲學**がである。』而して、**ドイツ人は昔から政治**

的行動に於いてよりも理論に於いて一層根本的であつたにしても、彼の忍耐も、いつかは、その限界に達する。かくて、彼にとつて『理論は單に理論のためにのみ役立つものではなかつた』ことが、明かになるであらう。『恐らく、決算日は、人々が考へるよりも近いて居るであらう。それだけ、人々は、その日のために豫め考へて置かなければならない。』(三二〇頁) 我々の社會哲學者は、既に、ドイツ革命よりも十五年以前に、かう書いて居るのである。

ナトルプの「哲學と教育學、それらの限界領域に於ける諸研究」(*Philosophie und Pädagogik, Untersuchungen auf ihrem Grenzgebiet, Marburg 1909*)の中で我々の問題にとつて關係があるのは、「社會的教育學」の補充として「個性と共同體と」の内的諸關係を一層詳しく研究して居る第二節のみである。社會的教育學の『基本命題』は、ここでは、次のやうに云ひ現されて居る。『教育の決定的諸條件は、共同體の中に存し、共同體の決定的諸條件は教育の中に存する。』(二三頁) 「この『教育』が普通の意味に解せられるものとすれば、マルクス主義者たちは、この命題の前半には悦んで賛成するであらうが、これの後半の眞理をば承認しないであらう。」而も、これらの緊密な相互關係を『時々一緒に考慮すること』ではなく『根本的に把捉すること』が、肝要なのである。このことは、これまでのところでは、精々、プラトンに於いて見出されるに過ぎなかつた。ルソーや、ペスタロッチ——後者は、ナトルプが多大の學問的勞作を献げて居る人物であるが——でさへ、彼らが恐らく注

意して居たであらうと想はれるかの相互關係をば、方法的に研究するまでには、否、單に整理して原理的に云ひ表すまでも、至つて居ないのである(一二三頁)。「個人」及び「共同體」は、夫々それ自體に於いて解せられる場合には、單なる抽象である。共同體は、諸個人の聯合に於いてのみ存立し、而も、個人は、共同體によつてのみ存立する(一二四頁)。天才にしても、同じことで、天才は、それに於いては共同體生活が他の人間たちに於いてよりも強く脈搏つて居るものに、過ぎないのである(一五〇頁)。然り、個性は、共同體の深化につれて、減退することなく却つて増進する(一八五頁)。即ち、前者は、後者によつて、維持せられ初めてよく確保せられる(一七八頁)。而して、他方に於いて、科學研究者並びに藝術家は、いかに彼らの創造が個人的であるにもせよ、結局に於いては、他の人間たちのために構成し形成するのである(一五四頁)。

尤も、共同體と教育との兩者は、不變の因子ではなく、絶えず發展しつつある理念、無限の課題である。その時々に興へられて居る社會(國家・教會・家族、或ひは、その他の個々の共同體)をして、教育を規定せしむべきではない。寧ろ、『社會的教育學』は現在の社會的狀態をば既に支持せられ難くなつて居る過去の社會的秩序と漸く遠くから近づきつつある將來のそれとの間の通路とのみ見做して、それらの社會に對しては、極めて辛辣な批判を加へる。かくて、社會的にはその本質に於いて靜止的であり且つ反動的であるところの、教育に於ける個人主義に反して、教育學的社會主義

は、『進化主義的であるが故に、必然的に、理論に於いては急進的であり、實踐に於いては改革的』なのである（二三一頁）。

カントの斷言的命令も、個人主義的意味のものではない。何となれば、それが『汝の行動の格率が普遍的法則となり得るやうに行動せよ』と命じて居る際に、それにとつては、個人の實踐的見地と共同體のそれとが一致して居るからである（一七七頁）。また、それが我々に他の型式に於いて『汝の身に於ける並びに他の各人の身に於ける人間性』をば畏敬すべきことを教へて居る際には、それは、それ自身に於いて存立する個人に就いて語つて居るのではなく、自己の身に於ける並びに他の各人の身に於ける *Menschentum* 即ち人間をば初めて眞に人間たらしめるものに就いて語つて居るのである。而して、これは、人間性は目的として取扱はるべきであつて手段としては取扱はるべきでない、と云ふことを意味するものではなく、人間性は決して單に手段としてのみ取扱はるべきではなく常に同時に目的としても取扱はるべきである、と云ふことを意味するものなのである。『これこそ、まさしく、共同體の概念である、……その中にあつては、各個人は、一方に於いては、凡ての人々の目的に對する手段であるが、而も、共同體の目的の中に共に包括せられて居ることそのこと故に、同時に、また、それ自身目的でもある。』（一三七頁）³⁰⁾

四、社會的理想主義

彼自身の手によつて出版せられた大著としては最後のもの、而して、彼が革命後に執筆した著書としては最初のもの（一九二〇年）の、標題が、この『社會的理想主義』(Sozialidealismus)である。これは、『理想的社會主義』(Idealsozialismus)と呼び換へられても、いいであらう。理想主義は社會的とならねばならず、社會主義は理想的とならねばならぬ、と云ふこと、これが、本書全體を貫いて居る指導動機なのである。彼によれば、社會主義は、『經濟・國家・教育に於ける人間共同體の建設』を意味する。本書の中心を占めて居るのは、その最後のもの、即ち、社會的教育 (die soziale Erziehung) である。併し、著者は、これに關聯して居る多くの哲學的・政治的並びに幾分か經濟的諸問題をも、哲學者の——而して、人間の——高い望樓から、取扱つて居る。而して、ナトルブは、一九一八年以後に於いても、社會主義に對する彼の態度をばシュタムラーのやうに歪め曲げては居ないのである。

舊い國家の一見確固たるものの如く見えた建築は、崩壞してしまつた、と云ふことから、彼の考察は、出發して居る。『全建築は、空虚であり根據を缺いて居た。それが見かけのみ確固たるものであつたことが暴露せられるためには外部からの非常に強い刺戟が必要であつたにしても、それは、必ず瓦解すべきものであつた。』(二頁) 而も、我々は、なほ、理念の民族 (das Volk der Idee)

であり、この理念は、破壊の狂信者の中にも生きて居る。問題は、ただ、必要な人間たちが會合し團結して直ちに積極的行動を取るこのみなのである。思ふに、凡ての専門家たちを網羅する『精神的勞働の中央會議』——政府當局及び民衆代表と接觸を保ちながら、凡ゆる方面に於いて完全に獨立して居るところの——が、設立せられなければならないであらう。金錢は、國民の陶冶と云ふ最高の問題が論議せられる場合には、何らの役割をも演ずることを許されない。何となれば、最後の一員にまで至る一切の民衆にとつて必要なのは、單に生きることではなく人間に生きることだからであり、且つ、今日に於いては、金錢は、『戰爭準備の爲に、酒・煙草・活動寫眞・寄席の爲に、その他多くの唯に生活を高め美しくしないばかりではなく生活を甚しく害ひ醜くする事物のため』(二三頁)濫費せられて居るからである。更に、陶冶は、自由の空氣の中に於いてのみ、發育し得る。それ故に能ふ限りの分權 (Decentralisation)、即ち、教育に於いては自由な學校團體、經濟生活に於いては強制的社會化に代る任意的組合(一家の生活から全國民の生活にまで亘つての)、並びに、ユトピアから科學を、經て初めて生活に導き入れられる社會的國家は、ひとりドイツの救濟(ナトルプは彼の先行者フイヒテに倣つて *Retting* と云ふ言葉を用ゐて居る)となるばかりでなく、全人類のための幸福及び模範ともなるのである!

更に、第二章の論述によれば、社會的革新は、ペスタロッチが既に要求して居るやうに、一切の

者の——高き者から低き者にまで至り乳兒・狂人・犯罪者をも含む、一切の者の——各種の内的束縛からの解放を意味しなければならぬ。尤も、この際に、新しい社會的生活が經濟的下層建築に依存せしめられてはならない。後者は、前者への確固たる出發點を成すに止るのである。一七八九年の革命は、『自由』を經濟的搾取の自由に、『平等』を一切の者が不平等化に對して持つ平等なる權利に、變じて居る。社會的であるとは、新たに成長する共同體意志(Gemeinschaftswille)に對して自由に自身から從屬することである。國家の破産も饑餓も敵の威嚇及び暴行も、來らば來れ、『崩壊しようするものは、崩壊せよ、まさしくそのことによつて、新しい建設のための土地は、獲られるのである。』(西一頁) 唯に、境遇が人間をつくるばかりではない、また、人間も境遇をつくる。「ナトルプはここに引用して居ないが、これと同じことは、マルクス及びエンゲルスによつても既に説かれて居る」。ひとたび認識せられた、事實の眞理は、最後には實現せらなければならず、この認識によつて喚起せられた意志は、實行に向つて進まなければならぬ、而して、先づ第一には、最も手近かなそれ、即ち、眞の自由・平等・博愛の中に存立する共同體への教育に向つて。

この『幸福への道』(第三章)に横つて居る困難——全世界にとつての——は、確かに、莫大なものである。『今日の變革に於いて最も強く感ぜられる缺乏は、偉大な感動的な創造的な理念』——一切の者を心の髓に至るまで感動せしめるところの——『の缺乏である。』(五〇頁) 道德・法律・科學・藝術

等の文化財は、眞に緊密な共同體なくしては發達し得ないのであるが、これに到達するためには、我々は、一切の共働者が財の生産及び消費に完全に自發的に參加することを含む組合的「従つて、社會主義的」經濟組織及び國家組織を、基礎とせざるを得ない（これは、マルクスである！）。先づ第一に、生活にとつて不可缺な事業並びに生活を保進すること疑ひなき事業が、組合化せられ、それ以外の事業は、能ふ限り速かに廢止せられなければならない。工業並びに農業の技術家及び指導者も、かやうにしてのみ救済がなほ可能であることを認識することに於いて、これの社會主義的基礎の上に立つべきである。消費者に對しては、シュタウディングが、既に、このことを論證して居る。ボルシェヴィズムと云ふ心理的疾疇は、かの『創造者の會議』（第一章參照）——その基本特質は、ここに、一層詳しく概説せられて居る——の助力を借りて臨時的になりとも社會主義の建物を建築しようと試みることによつてのみ、治癒せられるのである。

それ以後の凡てのものの基礎は、ナトルプにとつては、社會的教育である。これは——經濟と同じく——下から上に向つて、而して、人間から人間に對して行はれる直接的影響に於いて、建設せられなければならない。即ち、先づ、家庭の共同生活に於いて。次いで、社會的統一學校として。而して、これのために、ナトルプは、周知の如く、一九二〇年の全國學校會議に於いても、彼の全力を盡したのであるが、遺憾ながら、それは、彼の、換言すれば社會主義的な意味に於いては、今日

まで、擧ぐるに足るべき結果を生んで居ないである。我々は、以下の諸章に論せられて居る實際教育的諸問題、並びに、ここに樹立せられて居る個體——何のために生きるか、が、それに於いてはもはや問題となり得ないところの、生そのものとしての——の新しい概念には、立ち入らない。何となれば、さうすることは、我々の主題を離れることになるからである。我々は、彼の社會主義の概念に戻る。

單なる經濟的政治的意味に於いてではなく最も高い意味に於いては、社會主義は、『不精神』(„Ungeist“)に對する精神の共同的闘争であり、従つて、また、集團(Masse)の支配をではなく集團としての集團が分解して眞の共同體となることを意味する「マルクス及びエンゲルスが一切の階級支配の廢止を究極目標として云ひ表して居ることも、これを一致し得る」。それ故に、現在の分裂の眞の意味も、『西洋の没落』(„Scheitern“)ではなく、却つて、その全き勝利である。もし、『西洋』が、別に、カントの意味に於ける無限の課題としての文化の理念の肯定をも意味するならば。社會主義者は、人間の全き解放(Befreiung)「マルクスの所謂 Emanzipation」が最終的分裂を生まなければならぬとしても、恐れない。政治・經濟・藝術・宗教は、この醜態時代にあつては、解決を要する多くの問題を以つて充滿して居り、それらは、『精神の生活力に對する凡ての小膽な疑懼をば、難詰するであらう。』(一九九頁) 最後に、ナトルプは、人間の究極の意味は、自由並びに自己創造の

中に存する、我々は、頭骨を挫くほどの跳躍 (Salto mortale) によつてのみ、自然法則の彼の見るところに従へば過大に評價せられて居る不可避的必然性から、自己を救ひ得る、と述べて居るが、これは、『必然の國から自由の國への人類の跳躍』と云ふフリードリッヒ・エンゲルスの有名な比喻を、想起せしめる。

かくて、ナトルプの最後の社會哲學的著書も、また、それはこの二人の名をばあまり擧げては居ないけれども、『マルクス』を『カント』と結びつけることに導くものなのである。學問並びに人類にとつてあまりに早く（一九二四年八月）逝いたこのマイルブルクの思想家の社會主義は、確かに、凡庸政治家及び實際家には、あまりに高く見えるであらう。而して、彼も、また、自分が『今日明日をではなく遠い將來を目指して居る』（一六七頁）ことを、告白して居る。併し、社會主義の課題及び理念は、人類が存在する限り、存續する。それ故に、社會主義は、その土臺はナトルプも否定しないやうに物質的なものではあるが、『根柢まで考へつめ』られる時には、必然的に、『理想的社會主義』とならざるを得ず、他方に於いて、眞の理想主義は、『根柢まで考へつめ』られる時には、必然的に、『社會的理想主義』とならざるを得ないのである。

72 *Sozialpädagogik* は、一九〇四年に、増補せられた第二版(序文二四頁・本文四〇〇頁)が出て居る。我々は、本書の内容を概説するに當つて、この増補を、我々の主題に關係を有する限り、注意した。一九〇九年に出て居る第三版は、重要な變更を含んで居ない。その後、第四版、五版が出て居る。

25 これら兩書は、今や、Natorp, *Gesammelte Abhandlungen zur Sozialpädagogik*, I. Abteilung, Stuttgart 1907, 2. Aufl. 1922 の中にも収録せられて居る。

26 詳細な批評をば、私は、當時 *Eine Sozialpädagogik auf Kantischer Grundlage* と云ふ題の下に、*Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, Bd. 114, S. 214—240 に發表した。特に、S. 224—239 を参照せられよ。——Herbart 派の個人的教育學者に對する Natorp の反對と就つては、Staudinger, *Kants Bedeutung für die Pädagogik der Gegenwart*, *Kunststudien*, IX, S. 211—245 を参照せられよ。

27 私は、*Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, a. a. O., S. 225 及び *Kunststudien*, I, S. 203f. に述べて置いた理由によつて、規定せられる。衝動を充たれる。意志を持ち得る存在として人間の共同生活(Zusammenleben von Menschen als bestimmbarer, triebvoller, willensfähiger Wesen)と云ふ概念の方が、これよりも一層正確である。と駁す。なほ、Natorp, 2. Aufl., S. 152 を参照せられよ。

28 *Zum Gedächtnis Kants*, 1904. これは、最初、*Die Deutsche Schule*, Bd. VIII, S. 67f. に、並びに、フランス語に於つて *Revue de métaphysique et de morale* に、發表せられ、今や、Natorp, *Philosophie und Pädagogik*, Marburg 1909, S. 27—326 に、収録せられて居る。

29 彼は、Pestalozzi の著作選集 (3Bde., Langensalza 1905) を出版して居る外に、今や彼の *Gesammelte Abhandlungen zur Sozialpädagogik* (註文を見られよ) の中に収録せられて居る多くの論文を書つて居る。Pestalozzi, *sein Leben und sein Wirken*, Leipzig 1909, 134 Seiten は、それらの題目を總括して居る小書である。

30 Natorp の社會的教育學に關する思想を發展せしめることをば、彼の弟子 A. Görland 等、その著 *Paul Natorp als Pädagoge mit einem Beitrag zur Bestimmung des Begriffs der Sozialpädagogik*, Leipzig 1904 に於つて、試みて居る。私は、それを、*Kunststudien*, X, S. 177—180 に詳しく紹介して置いた。種々なることを述べて居る中で、Görland は、經濟的・國民的・道德的個體としての人間の三重の屬性に照應して、經濟的價值表現としての技能 (Talent)・國民的價值表現としての品性 (Charakter)・道

德的價值表現としての天才 (Genie) が存在することを、説いて居る (この際に、彼は、『天才』と云ふ語に、精神的道德的人格の最高の段階を意味せしめて居るのである)。

(未完)